

教育上の課題と工夫

クリティカル緩和ケア演習（4年前期、1単位）では、侵襲性の高い治療を受ける人々の看護を学習することを目的に演習を展開している。

2019年から流行したコロナの影響で、大学における対面による授業や演習が困難になり、遠隔授業への変更を余儀なくされた。2022-23年度においてもコロナの影響が継続しており、コロナの状況に合わせて、対面および遠隔演習にも対応可能な教育環境の整備が必要であった。そこで、クリティカル緩和ケア演習では、教育の質の担保と学生の学習の促進を目標に、あらゆる状況にも対応できるように、DX（Digital Transformation）を教育に活用したので、主な取組みについて下記に報告する。

1. 教育用電子カルテ（Medi-EYE）の活用：教育用電子カルテには、臨床に近いレベルの情報量が含まれており、自宅からでもアクセスが可能である。学生は模擬患者に関する膨大な情報の中から必要な情報を収集し、患者の状態をアセスメントし、看護過程を展開した。従来、活用していた紙面による模擬患者の情報には教員が必要だと判断した情報が記載されており、学生は、重要な情報とは何かについて考えて選択する点において限界があった。しかし、電子カルテを導入することで、より臨床に近い環境下で看護過程を展開することが出来た。学生からは、「電子カルテの活用は、大変だったが、実習の際に、情報を収集するうえで、演習での学びが役立った」との意見等が得られた。

2. VR救命救急トレーニングシステムを活用した技術の習得：演習で教授する心肺蘇生法の事前課題に、VR救命救急トレーニングシステムを活用して技術の習得を行った。本システムは、琉球大学工学部と医学部との共同研究により開発された Virtual Reality の技術を活用したシステムであり、胸骨圧迫を行う際の学習者の手の位置や胸骨圧迫の頻度が測定でき、学習者が心肺蘇生を行っている際の、圧迫率（回数）、圧迫深度、各圧迫の解除、中断の頻度と長さ等のデータをリアルタイムで記録できる。

2022-23年度のクリティカル緩和ケア演習では、VR救命救急トレーニングシステムが入ったPCを3台、成人演習室に準備し、決められた期間内に技術が一定レベルに到達するまで各自トレーニングを行い、その結果を教員へ提出するという事前課題を課した。学生からは、PCモニター上に技術が数値ベースで可視化されたことにより、楽しく学ぶことが出来たとの意見が挙げられた。本システムの活用により、学生が主体的に学ぶことができ、知識と技術のリフレクションにも有用であったと評価できる。今回導入したシステムは、今後、自宅や学外でも活用できる可能性を有しており、様々な状況における学生の多様な学びに資することができる。

コロナ禍の教育活動を振り返って

コロナの状況に合わせて、急な遠隔対応が可能で、かつ教育の質を担保する取組みが求められ、DX化が必要不可欠であった。新たな取組みには、労力も大きかったが、結果的に、一定の学習効果が担保され、時代に合わせて、変革することの必要性が示された。After コロナに向けて、引き続きDXを活用しながら学習効果を高める教育方法を発展させる必要があると考える。
